日　新　聞　【新聞定価1ヵ月 4,300円(本体価格3,982円+消費税318円)】1部売り(消費税込み)朝刊150円 夕刊50円 〔第3種郵便物認可〕

旧統一教会批判に「危うさ」

カルト脱会支援する僧侶 瓜生崇さん

安倍晋三元首相が銃撃され死亡した事件をきっかけに、報道やインターネットでは「世界平和統一家庭連合（旧統一教会）」への批判があふれている。逮捕された山上徹也容疑者(41)が動機として安倍氏と教団との関わりを挙げたとされるためだ。「霊感商法」や献金の強要などの問題や政治家との関わりは批判、検証されるべきだが、信者個人の人格や、旧統一教会以外の新宗教もまとめて否定するような言説も見られる。「危うさを感じます」。カルトからの脱会支援活動を続けている真宗大谷派の僧侶、瓜生崇さん(48)はそんな懸念を口にする。

教団の中にいる人と社会との「分断」について懸念を語る瓜生崇さん＝京都市下京区で7月25日、花澤茂人撮影

うりう・たかし　1974年生まれ、東京都出身。大学在学中に宗教団体「浄土真宗親鸞会」に入会し、12年間の活動後に脱会。ＩＴ企業勤務などを経て2011年から真宗大谷派・玄照寺（滋賀県東近江市）住職。学校や寺院でカルト問題啓発の講演活動などを続ける。著書に「なぜ人はカルトに惹（ひ）かれるのか　脱会支援の現場から」（法蔵館）。

「旧統一教会の信者はいま、すごく苦しんでいるはずです」。知人に現役信者が何人かいるという瓜生さんは、複雑な心境を明かす。「旧統一教会が無理な献金の要求など社会的な問題を起こしてきたのは間違いなく、政治との関わりも含めきちんと批判すべきです」。信仰の核心部分を隠し詐欺的な勧誘をしてきたことも、カルトの重大な特徴として問題視する。ただ、信者にも層があり、こうした被害に遭わずに地道に信仰活動を続ける人もいると指摘する。「一斉にバッシングを浴び、信仰そのものが悪であるように言われることはつらいと思います」

瓜生さんがまず強調するのはマスコミの責任だ。「全国霊感商法対策弁護士連絡会（全国弁連）や日本脱カルト協会が継続して旧統一教会の問題に取り組んできたのに、マスコミ各社は無視し続けた。抗議や訴訟を恐れていたのでしょう。もしメディアが継続的に問題を明らかにしていたなら、旧統一教会もあそこまで暴走しなかったかもしれません」。事件以降は一転して、せきを切ったように連日報道されている。「みんなが取り上げはじめたから一斉に報道しているように見えます。被害者たちも、これまでどうにもできなかったやるせなさの反動で次々に声を上げているのでしょう」

「信仰自体が悪」信者と社会分断

異質さばかり強調 論点見失う

そんな状況を背景に、ツイッターなどのＳＮＳ（ネット交流サービス）では旧統一教会を「潰す」など乱暴な言葉も飛び交う。「正しさを抱きしめ、間違ったものを正義の鉄ついでたたきたいという欲求は誰にでもある。だから、人間は絶対悪を見つけたときに一番残酷になるのです」。しかし旧統一教会の信者たちが問題のある行動を取るのも、教団の示す「絶対の正しさ」のためだろうと瓜生さんは指摘する。さらに言えば、地下鉄サリン事件などを起こしたかつてのオウム真理教の信者たちもそうだっただろうと。「合わせ鏡のようなものです」。瓜生さん自身、学生時代から宗教団体で活動した際、教団が与える「答え」の正しさを信じ続けた。一方で、教団の勧誘方法などに疑問を感じて脱会した後には、伝統教団の僧侶から「お前は間違っていたが、正しいところへ帰ってきた」という態度を取られることが多く、それまでの自分を全否定されるようで苦しく感じたという。

瓜生さんが長期的な影響を懸念するのは、教団の中にいる人たちと社会の「分断」だ。「旧統一教会の信者の中にも、これでいいのかと思っている人は外部から想像される以上にたくさんいる。しかしこの状況では『どうせ話しても分かってもらえない』『自分も同じようにたたかれる』と、外部に相談する糸口が絶たれかねない」。特にいわゆる「2世」たちの苦しみが想像されるという。「教団が外に向かって布教や勧誘活動ができなくなると、2世3世に信仰を継ぐ圧力が強まる。親も信者なわけで、外への相談ができなければ『この教団は本当は正しい』という考えに身を置くしか生きる道がない。そしていずれ、搾取される人の幅が狭まり、負担が大きくなっていくんです」

ここまで批判が盛り上がるのは、旧統一教会が「宗教団体」であることも理由の一つだと瓜生さんは考える。「例えば企業が大きな不祥事を起こしたとして、その会社に勤めている人全員と仲良くできないかというとそんなことはない。しかし宗教はそうはいかない。自分と違う信仰に対し、人は特に強く異質さを感じます」。「異質さ」はまた、人の興味を引きつける。「オウムの時もそうでしたが、特にテレビ報道では『こんなにおかしな信仰をしている』という点が強調されます。それが視聴率につながるから。でもそれは論点が違う。教えがいくら異様でも、批判されるべきは個人の自由や尊厳を侵害する行為であって、信仰そのものではないはずです」

一般の人だけでなく、宗教者自身も同様だ。「仏教やキリスト教の伝統的な教団の一部の宗教者が『旧統一教会はおかしな新興宗教』『異端』など、『自分たちとは違う』という態度を取っているのを見聞きします。宗教者自身が、自分の教団の正しさを握りしめてしまっている」。しかし現在は社会的に受け入れられていても、歴史をさかのぼれば新興勢力への弾圧や戦争協力など人権侵害につながる行動を取った教団は多い。「たまたま今、そういうことをせずに済んでいる。そうした謙虚さがなければ、宗教全般に対する信頼が失われるでしょう」

異質さばかりが注目されると、大事なことが見えづらくなるという。例えば、旧統一教会に多額の献金をしていたという山上容疑者の母親の苦しみだ。「あのように生きざるを得なかった原因は元々、旧統一教会とは別のところにあったはずです。『おかしな宗教にハマって洗脳された』と処理しておしまいでは、また同じ事が繰り返されるのではないでしょうか」

【花澤茂人、中田敦子】